

はじめに

金沢大学附属小学校では、「であう・つながる・うまれる コミュニケーション」のテーマによる研究が二年目に入り、職員の中の共通理解も進んで、よりテーマに即した実践が、各教科・各テーマで進められています。この紀要では、それらの実践と研究をご報告します。まだまだ至らない点もあるかと思いますが、なにとぞご高覧いただき、忌憚なきご意見をいただければ幸いに存じます。

昨今、コミュニケーションについて語られる機会が多くなったように思われます。そして、ともすれば、日本人は外国人にくらべてコミュニケーションが苦手だとか、最近の若者は他人とのコミュニケーションが上手でないとかいった、皮相的で否定的な語られ方が目立つようにも見えます。しかし考えてみれば、どのような社会も文化も、構成員のコミュニケーションなしに成り立つはずはなく、それぞれの組織や集団の中には、それ固有のコミュニケーションの伝統が存在してきたはずなのです。ただ、社会の成熟とともに価値規準が多様かつ複雑になって、従来型のコミュニケーションの伝統が、上手く働かなくなっている面があるにちがいません。また、情報伝達技術の急速な革新が、伝統的なコミュニケーションの変化をうながしていることも事実でしょう。しかし、教育の世界でよく言われる不易と流行ということが、ここでも言えるのではないのでしょうか。他の人間（たち）に何かを伝え、共有し、その反応を知りたいと思うことほど、人間にとって根源的な欲求はありません。その原点を大事に、変化が求められているものと、変わらないものとを区別し、無理のない変化を追求する冷静なバランス感覚こそが、現在求められているのではないのでしょうか。

本校の研究では、当たり前なこと、基本的なこととしてのコミュニケーションの姿が、大切にされていると考えております。目を見張るような革新的な手法は、今の段階ではあまり表には出ていないかもしれません。けれども、子どもたちの持っている潜在的な力を、可能な限り引き出そうとする真摯な試みは、きっと、この紀要に掲載された実践報告から読み取っていただけるものと考えております。

最後になりましたが、つねづね本校の研究に、直接・間接にご協力とご支援をいただいている皆様方に、厚く御礼申し上げます。

平成 23 年 11 月 3 日

金沢大学附属小学校

校長 山本 一